

## 「命と水を守るために」

愛媛県立松山西中等教育学校 二年

きたち ななみ  
北地 菜々美

「今日の貯水率は何%かな。」

私の祖母は毎朝、松山市の水瓶である石手川ダムの貯水率確認を欠かさない。前日比、前年比まで調べる徹底ぶりなのだ。今では日常となっている光景だが、以前なぜダム貯水率にこだわるのか聞いたことがある。私の住む愛媛県松山市は、今から三十二年前の平成六年七月から十一月まで空梅雨による大渇水が起こり、断水、給水制限を余儀なくされた。厳しい暑さの夏、二ヶ月もの間、一日五時間しか水が出ない断水をして乗り切ったという。私は当時の状況に思いを巡らせた。思わず水道の蛇口をひねる。透き通った水がキラキラと淀みなく流れ出る。

「一日のうち十九時間も水が出ないなんて。」断水の経験がない私は、必死に祖母の想いに寄り添おうとするも簡単に想像できず、無意識のうちになぞかいていた。自分が必要な時に蛇口をひねれば水が出る。私はこれまで、それが特別なこととは思いつかなかった。断水により食事、衛生面全ての日常生活に支障が出て心身共に疲弊した記憶から、ダムの貯水率が気になって仕方がないのだと祖母は話をしてくれた。

「水は天からの恵みもの」しかし、時にそれは私たちの命をおびやかす水害をもたらす。今でも私の耳に残っている音。令和五年日七月一日深夜二時二十一分に鳴り響いた愛媛県土砂災害情報警戒レベル4を知らせる緊急速報メールの音だ。石手川が氾濫する水位に達しているのと知り、幼い頃から身近にあった穏やかな川が荒れ狂う姿を想像し恐怖でなかなか眠りにつくことができなかった。しかし、ふと経験豊かな八十才になる大先輩の話を思い出した。

「おいしい、空が暗くなってきた。雨が降るぞ、川から上がれ。」

近所に住むその人は、自身が川遊びをしていた子ども頃、天気が崩れそうになると大人から声をかけられたそう。理由は明白で、当時は石手川ダムがなく、大雨のたびに川は氾濫を起こしていた。茶色く濁った激しい流れがうねりを上げ、少し前まで遊んでいた場所を飲み込んでいく様を何度も経験し、抗えない自然の力を痛感したという。そこに石手川ダムが建設され、これで水害が軽減されると胸をなでおろしたそう。耳を塞ぎなくなる速報メールの音で増していた不安は、「ダムがあるから大丈夫」という思いで私の心を満たしていた。

小学四年生の時、授業で水とダムの関りについて学び、貯水率を心配する祖母の姿を見てきた私は、毎夏、石手川ダムを訪れるようになった。ダム見学の一年目。目に飛び込んでくる全てが目新しく、暑さを感じさせない地下道、下から見上げる放流の迫力を素直に楽しんだ。治水の歴史、構造など知識を深めていくうちに、ダム見学で過ごす間に少しずつ変化が起きてきた。四年目の昨夏、ダムのゲート操作を行う機器、監視モニターが設置された操作室へ入った瞬間、ただの好奇心だった気持ちから心が引き締まる思いに変わった。命と水を守るこの場所を、ダムに携わる人がどれだけ尽力されて建設したのか、日々細心の注意を払って働いているのか感じる事ができたからだ。命と水を守ろうとする熱意に私は少しでも近づきたいと思った。

近年、地球温暖化により人間が制御できない災害が増加している。気象庁では今夏から最高気温が四十度以上となる日を「酷暑日」と定義し予報用語として決定した。今後さらに命と水を守ることが困難になると予想できる。断水や災害の経験がない私だが、貪欲に素直に学び、想像力を鍛え、変化する環境に合わせた方法を模索していきたい。今日も蛇口をひねると水が出る。そんな穏やかな日常を守るために。